



特定非営利活動法人ヒマラヤ保全協会 2008 年度報告 & 2009 年度計画

1. 2008 年度事業報告

1-1. 生活林プロジェクト

2008 年度は、合計 21,100 本の苗木生産、植樹をおこないました (2009 年 6 月集計)。樹種は、ナルチャン村では、マツ (マツ科)、ハンノキ (カバノキ科)、パンユウ (バラ科)、マラータ (薪用)、ポンカン (オレンジ)、シツソ (インデアンローズウッド)、トゥーニ (センダン科)、一方のサリジャ村では、マツ (マツ科)、ハンノキ (カバノキ科)、カンニュー (クワ科)、ティムール (ミカン科) などでした。

苗畑の運営はとても良好な状態にあります。植林はおもに、2008 年の雨季に共有地を中心に植栽され、植栽後の生育も良好であり、目だつた枯死等は見られませんでした。

また、サリジャ村においては「イラクサ織り」(織物事業)と「手漉き紙」(製紙事業)の支援もおこないました。それらの生産については質・量ともに向上してきています。その一方、輸送・販売については今後とも努力が必要です。ヒマラヤ保全協会では日本で途上国のクラフト製品をあつかっている関係先と協働して、販売ルートの開発に取り組んでいます。



植樹の様子 (ナルチャン村)



プロジェクト地 位置図

(カリガンダキ川の東側がアンナプルナ地域、西側がダウラギリ地域です)

1-2. エコ・プロジェクト

- ゴミ処理・観光ルート美化 -

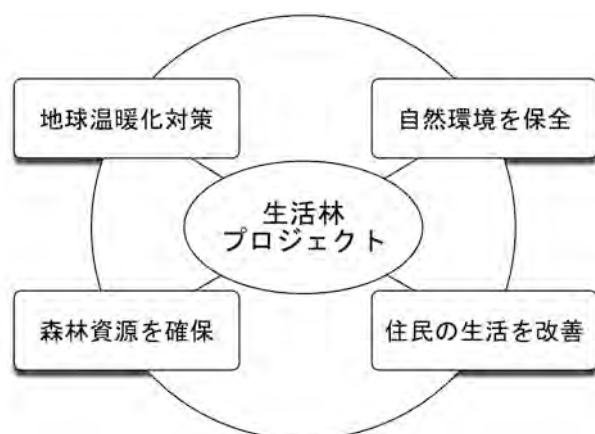
ネパールでは、ライフスタイルの変化、観光客の流入などにより、様々なゴミが多量に廃棄されるようになってきました。そこで、当協会では、村にゴミ箱を設置し、ゴミ集積場を建設するプロジェクトを 2008 度もおこないました。

昨年度は、「エコツーリズム」をキーワードに、ナルチャン-タトパニ地域において実施しました。住民を対象にしたワークショップも開催し、環境教育もすすめました。

1-3. その他の事業

教育支援 (奨学金支給) : ネパール山村僻地の子供たちを育てるために、めぐまれない環境にありながらもよく勉強する小中高生 53 人に奨学金を支給しました。保健衛生教育 : 15~30 歳の人々を対象に、HIV/AIDS 教育をおこないました。

生活林プロジェクトが目指していること



(A) 地球温暖化の対策としてとりくみます

今日、地球環境問題として地球温暖化がクローズアップされています。地球温暖化は、温室効果ガス（CO₂）の増加によってひきおこされているとされ、その削減が世界的な課題になっています。CO₂削減のためには、その排出量を減らすとともに、それを吸収する森林を増やすことが必要です。このような意味で、森林減少がいちじるしくすすんでいるヒマラヤにおいて植林活動・森林保全をすることには大きな意味があり、ヒマラヤの森林

は、ヒマラヤだけのものではなく世界へとつながっています。

(B) 自然環境を保全します

「森林は緑のダム」と言われるように、森林ができると樹木が土地に根をはり、地下水をはぐくみます。ヒマラヤは南アジア全域の水源地としても非常に重要であり、森林は、その水資源を涵養するためにはなくてはならないものです。また、雨季の豪雨のとき、樹木の枝葉がクッションとなり雨滴が表土に直接あたらなくなるので、土壌流出をふせぐ効果も生じさせます。水資源の涵養、土壌保全のほかにも、動植物の保護による生物多様性の保全、景観の保護など自然環境を保全するための様々な効果を生み出します。

(C) 森林資源を確保します

ヒマラヤで暮らす人々は、森林の中に入り込んだ生活をしており、その暮らしは森林資源に高度に依存しています。自然保護だけを目的にするのであれば保護区（保護林）を増やせばよいのですが、それだけだと、ヒマラヤ山村の人々は生活していけなくなってしまいます。ヒマラヤの植林活動により、薪・家畜飼料・材木・食品・薬草・堆肥・換金作物・水などの森林資源を住民に供給し、住民のもっとも重要な生活基盤をつくりだします。

(D) 住民の生活を改善します

植林により、薪やその他の森林資源を豊富に生み出す森林が集落の近くに再生されると、農業の改善とともに、住民の社会生活も改善できます。ヒマラヤ保全協会は、住民の生活基盤となる森林を「生活林」と命名し、単に木を生産するだけではなく、地域住民の生活を積極的に改善する努力をつづけています。

これにより、地域住民が植林活動に主体的に参加するようになってきています。この取り組みは、住民みずからがみずからの森をそだてるといった作業であり、住民が主体的に参加しながら、持続的継続的に自然環境を再生・保全していくプロセスです。

「生活林」は、人手が入ってこそ健全に保たれる森林ですので、住民の主体的参加があつてこそ永続的に森林を保全していくことができるのです。こうして、森林を利用しつつ育てるという仕組みができあがれば、森林と住民の循環的關係が構築され、自然と人間が共生していく道をひらいていくことができます。

2. 2009 年度事業計画 ～「生活林」プロジェクトを推進します！～



今年度も、「生活林」プロジェクトを中核にして活動を推進していくことが決議されました。

ヒマラヤ山中には数多くの村々が点在しています。私たちの事業地はそれらの村々であり、それは、住民の居住地（集落）を中心にして、その周囲に自然環境（自然林）がひろがっているという構造をもっています。昔は、住民は自然環境をたくみに利用し、自然環境は住民に恩恵をあたえるという、住民と自然環境との共生関係がなりたっていました。

しかし、人口増加や開発の影響で、森林の伐採がすすむと自然環境は荒廃し、この共生関係はくずれてしまいました。住民は、燃料である薪をとりにいくのに、往復5時間もかかるというのが普通になってきています。

そこで、住民の居住地の近くに「生活林」という、住民の生活を改善することに役立つ森林をつくるプロジェクトがはじまったわけです。「生活林」は、住民と自然環境との間の地帯につくられ、住民の生活改善に役立つ樹種を積極的に植えていきます。これにより、薪などの森林資源が容易に手に入るようになるとともに、従来の自然林の後退はなくなり、自然環境がまもられます。

こうして、「生活林」は、住民と自然環境との緩衝地帯として機能し、これを介して住民と自然環境は敵対するのではなく、共生関係が再生されるという仕組みができあがります。これを単純にモデル化すると「住民-生活林-自然環境系」（上左図）となり、私たちは、事業地を「住民-生活林-自然環境系」にするというビジョンをもって本年度も活動をすすめていくということになります。

1-1. 生活林プロジェクト

(1) ダウラギリ地域への展開 -苗畑運営と植樹を拡充します-

従来のアンナプルナ地域に位置するナルチャン地区・サリジャ地区においては、苗畑の拡充を終了し苗畑を完成させ、また、継続的な植樹活動のために苗畑を維持、その運営を管理していきます。一方、アンナプルナ地域の西側に位置するダウラギリ地域において、あらたに事業を開始します。具体的には、ドバーベガ地区においてあたらしい苗畑を建設し植樹を開始します。これらの事業により苗木生産本数（植樹本数）を増やします。

(2) 生活林プロジェクト<ナルチャン・サリジャ地区>

-第3フェーズを終了します-

<<第3フェーズのポイント>>

(1) 植林活動を軌道にのせます（目標2万5千本）。

(2) 森林資源を有効に活用しながら住民の生活を改善し、環境調和型の生活基盤をつくります。

(3) ヒマラヤ本来の自然林を保全します。

ナルチャン地域・サリジャ地域において、これまでに建設した苗畑の苗木生産能力を一定水準まで向上させ、住民の主体的参加による、苗畑の自立運営、持続的・継続的な植林・森林管



ロクタの苗木（紙漉につかわれる）

理を実現します。昨年度に建設を開始した、集落と森林地域とをむすぶ通路 (trail) を延長・完成させ、堆肥・薪、その他の森林資源等の運搬にかかわる住民の労働を軽減し、住民の生活を改善します。織物施設 (イラクサ加工施設) および紙漉施設 (ロクタ紙加工施設) を完成させて、織物事業および紙漉事業を開始し、またその経営を軌道にのせ、住民の収入向上をはかります。本事業は、2005 年度に策定した「生活林づくりプロジェクト」の計画 (第 1～第 3 フェーズ) の最終フェーズであり、今回をもってすべての施設を完成させ、第 4 フェーズへとつなぎます。

村人の声



ダン=クマールさん

私たちのベガ村では、地滑りや崖崩れが多発して集落に危険がせまっています。このあたりではもっとも危険が多い地域であり、これから、コミュニティ防災が重要です。土壌の流出は村の土地を崩壊させるだけでなく下流域にも悪影響をもたらし、時には大災害の原因になります。今後植林をすすめて土壌流出をくいとめていかなければなりません。

カリガンダキ川沿いに自動車道路が開通して村の暮らしは良くなるとおもいます。村で採れた農産物が売りやすくなるし、町から物が買いやすくなります。村の暮らしや生活は変わったほうがよいです。そうすれば村が発展します。道路や森がよくなれば、ふるい耕作地の改良もでき、農業の近代化ができます。お金をどのように手に入れるかといれば、今は、出稼ぎ以外にほかに方法はありませんが、農業の生産性を高め、農作物が市場で売れば現金収入が得られます。IHC (ヒマラヤ保全協会) のツアーも是非きて、お金をおとしてほしいです。

最近のあたらしい話題と言えば、インターネットが通じたことです。IHC ネパールのマハバール先生のおかげです。内戦がおわり、とにかく、私たちの村は大きな転機にさしかかっています。多くの人たちと協力してプロジェクトをすすめていきたいです。

1-2. エコ・プロジェクト –ゴミ処理・観光ルート美化–

本計画は、[1] クリーン・ビレッジ化 (ゴミ処理・観光地美化)、[2] 住民のトレーニング (環境教育)、[3] エコツーリズム開発 (環境調和型の観光開発)、という 3 本柱を基軸にしてすすめられ、これらにより、環境保全 (公害防止) とともに、住民の衛生管理・生活改善・自立、地域の活性化を目指していきます。

本年度は、キバン-ナルチャン地区の環境保全・観光ルート美化を一層すすめ、環境教育を徹底し、住民の意識をさらに向上させます。ゴミ箱作成・設置、ゴミ集積場の建設や、住民のためのワークショップを実施します。このような事業が成功すれば、これがモデルとなってネパール各地に効果が波及していきます。ネパールの人々の生活を改善するために、また「観光立国」ネパールにとってこれは非常に重要な意味をもつ事業です。

1-3. その他の事業

教育支援プログラム：ネパールのめぐまれない子供たち 53 人に奨学金を支給します。

保健衛生プログラム：15～30 歳の人々を対象に、HIV/AIDS 教育を実施します。

特定非営利活動法人ヒマラヤ保全協会 2008 年度報告 & 2009 年度計画

2009 年 8 月 1 日発行

編集・発行所 特定非営利活動法人ヒマラヤ保全協会 (IHC)

〒151-0053 東京都渋谷区代々木 3-5-7 シグマロイヤルハイツ 403

TEL/FAX: 03-5350-8458 E-mail: ihc_jpn@ybb.ne.jp <http://www.ihc-japan.org>